
NERVOUS NOVEMBER

- 月下草シリーズ08 -

秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NERVOUS

NOVEMBER

-月下草シリーズ08-

【Zコード】

Z7612C

【作者名】

秀

【あらすじ】

『11月』になると繰り返される悪夢。そして繰り返す記憶。傷ついた心。『癒し』はその解答になりうるのか？月下草シリーズの一つの結末。登場人物は三山斎（S）、菅田千尋（K）、立花美子（M）、空木秋晴（S）。並んだ順番に読んでもいいし、その人だけを追って読んでも構いません。

Sの場合（前書き）

この話は、「月下草」シリーズの終わりではありませんが、結末の一つです。内容的に『夢』と『過去の記憶』と『現在の思い』が混在しています。でもあまり纏まずに読んでみてください。

Sの場合

最近寝覚めがやけに不快だ。

実際には何も異変などこの身体に起つてなどいないのに、全身にまつわりつくようなねつとりした倦怠感。そして吐き捨てたいほどの嫌悪感。

分かつていてる。本当は。これを解らないと言えるほどかまとどぶれない。

だから、今夜こそ確かめようと思つ。

夢を操るなんて日常茶飯事の私を、ここまで弄つてもの知らずを確かめるのだ。

*

夢の中で意識を取り戻した。そして状況を認識し、確認する。場所はよく分からぬ。薄ぼんやりした、無機質な部屋のようだ。やたら広くてうすら汚い。こんな場所に見覚えはない。生あたたかくて、肌に湿っぽい。

部屋には私と、あと二人の女がいた。見覚えがない。ただ、薄ぼんやりした記憶を手繰つてみると、彼女たちは私と一緒に無理矢理連れて来られていたのだ。

田を上げると、やたらまだ広い部屋の向つに、『不快』の影。

ああ、そうか。

私は彼女たちと一緒に連れて来られたのだ。

『不快』が好色な嘲いをつくる。のつそり上げたその腕が、指が、私たちを誘う仕草に動く。

だつて、『彼』にとつて私たちは、『オモチヤ 玩具』なんだから、なんだ

そうだ。

不快で、不愉快で、吐き気がするほど田の前の『男』が気色悪い。牝を眺める牡の表情が、いつそ獸のものであればまだしもかもしれないのに。

誘いに応じて、傍らの女たちがもぞもぞと動いてそいつへと近付いていく。その様子ににたりと半開きの唇を歪ませる『そいつ』。そのだらしなく笑みに見開かれた眼が黄濁したケダモノのそれに思えて、内腑の辺りで何かがせり上がるような感覚を覚える。

意識は今すぐにも逃げ出したいと訴えているのに、身体の筋肉を脳が動かそうとしない。まるで金縛りにあつて居るときのようだ、ただ胸の辺りがむかむかする。

だだ広い部屋の向こう側で、『玩具』に戯れかかりまぐわいあう『不快な獣』。一人は無表情に、一人は無邪気に相手を受け入れる。無邪気な女は無邪気すぎて、それが不快なのか嗜虐心を煽るのか犯されているようで、それでも女は笑っている。

それに飽きたら、次は私の番？

逃げればいい。逃げる隙はたくさんある。でもここから動かないのでどうやら私の意志らしい。身体が鉛のように重い。好奇心が見てみたいという。不可解だ。

馬鹿な行動と認識して馬鹿をやつて居る自分を肯定しつつある。これは別の表現で「期待」とでもいうものなのかな？

不意に私の足下へ滑り込んでくる女。

ショウコさん がふざけたように派手に私の方へ飛び込んで。思わず飛び退つて避けた私を、裏腹に冷静に見上げてくる視線。あるいは軽蔑の。

ショウコさん ?逃げろって?跳べるだろつって?
冷静な、諫める視線。或いは咎めるものだったのか?
いずれにせよ、私の呪縛を解いたのはその視線。

身体は軽かつた。

もう一度、跳んで、そのまま後も振り返らず駆け出していた。

『ただ逃げないというだけのおもいなら、心も動かされない光景にも情景にも足を止める価値などお前は持ち合わせていないだらう?』

いつまでも冷たい視線が私をそう責め立てている。

* *

は、と田が醒めた。やたらと爽快な田覚め感に、酷い嫌悪を覚える。

何という夢を見るのだ、私は。知らない。誰も、知らない。不快な男も、不愉快な女も。ショウコ井子さんはどうして井子さんなのだろう? 夢の中の自分の不可解な思考回路にも辟易する。それなのにやたらと目醒めがいいのは不愉快を通り越して薄ら寒い。

腕を伸ばして枕元の時計を引き摺り寄せる。「12：13」まだまだ30分はゆうに寝ていられる。肩からずり落ち氣味の布団を頭まで引き被つて、もう一度と瞼を閉じる。

願わくば、次に目覚めたときにはこの明け初めの夢など記憶から抹消されていますように。

* *

「！」

ひどい痛みに目が醒めた。田の前の時計の表示は「5：44」。

薄明るくぼやけた視界と、いきなり覚醒させられた身体。腹に感じ

る鈍く重い疼痛に、思わずぎゅうっと眼を瞑つて腹を抱え、身体を折り曲げる。ぎゅうっと。出来得る限りに身体を小さく小さく縮こまらせて。

ああ、出血しているのかも

腹筋に力を入れてみると、少しほは痛みが紛れたような気がする。

ああ、何か出ていいっているような気がする

するぬると何かが腹の中から体外へ出ていく感覚を、無感動に享受する。

このまま、内臓全て出ていいてくんないかしら

もうすれば、あんな夢を見てあんな思いしなくてすむかもしけない。

そりやつて、

耳のすぐ側で私じゃない声が聴こえた。私じゃない。ショウコ井子、だ。

否定するんだ。全てを

今度こそ、本当に私は覺醒した。

* * * * *

微かに震える腕が半身起こした身体を支えている。
心臓がばくばく躍つていて、もしかして心臓麻痺を起こして死ぬ
ときつてこんな感じなのかなんて頭の片隅で呟いてみる。

でもこの最悪な目醒めが、かえつて私を安堵させる。これぐらいの報いは必要だろ。私には。

すぬすると布団の上を引き寄せた時計の表示は「6：29」認識するとき同時に目覚ましのベルが鳴る。コンマ5秒でそれを止め、私はようやく本当に一日をスタートさせる目覚めを手に入れた。

三山彦（サイわん）の場合

Kの場合

夜の闇に蝶が舞っていた。
盲のように、狂えるように、羽ばたくその姿は、どこか恐ろしく、
けれども美しかった。

困ったなあ。

心底そう思いながら、俺は田の前の彼女を見る。泣き腫らした田に荒んだ雰囲気。先ほどまで喚いていた口は今は歪んだまま引き結ばれて、時折すり上げる息の音とため息のような大きな呼吸音だけが漏れていた。

この人とは付き合い始めてもうすぐ3ヶ月になろうかといふくらいだったが、初めて見る形相であり、初めて聞く罵声であった。

「どうして何も言わないのよ」

しばらく、ふりの嗚咽以外の言葉は、俺にひとつではやはり理不尽といつ以外ないもので、俺はやはり何も答えられず、一旦開きかけた口を開ざす。

「どうして何にも言わないのよー、そりよ、どうせあなたは何も言わないのよ。何も考えてないんだものね、あたしことなんか！」
どうやら何も返事がなかつたことが彼女にとって気に喰わなかつたらしく、喰つてかかるようにまくしたてられる。

困ったなあ。何度もか分からぬ慨嘆を胸中でこぼす。もはや慰めようという氣も萎えている。弁解るべきなのかもしれないが、一体何を言えばいいのか分からぬ。そもそも彼女は一体何をそんなに怒っているのか、それすら俺にははつきり分かつていな。

ただ、これがいつものパターンであるところとは確かなことだつた。

彼女との関係において、に限らない。女性と付き合つてだいたいいつ頃からかこういう状況に陥る。しかしこれも俺にはそんなときの彼女たちのことが理解できないのだ。一体俺が彼女たちに何をして機嫌を損ねたものやら、何を彼女たちにすれば満足してくれるのやら。ただ、こういう状況に陥る頃の俺はひどく疲れているといふことは確かなことであつた。

「聞いてないでしょ、あたしの言つてる」と…

「ばん、と派手な音がして俺は手を上げた。いつの間にやら俯いていたらしい。見ると彼女は机に両の掌を突いてこっちを睨んでいた。

「何を考えてたのよ、誰のことを考えてたの…？」

「悪かったよ。だから落ち着いてくれ」

「まうつとしていたのは事実であるから、俺は素直に謝る。とりあえず話をしないことにまだじつもない。しかし彼女は余計に怒つてしまつたようだつた。

「いつもいつもそなんだから！ちゃんとあたしを見なさいよ！なんなのよ、あなた！あたしつて一体なんなのよ…」

正直に言つて意味が分からぬ。彼女のいわんとするところが、俺にはもはや理解できない。なんだかどうでもよくなつてしまつた。

「おまえ、うるせーよ」

尚も何か言おうとしていた彼女の言葉を遮つて言つた。

後のこととは思い出したくもない。ただただ無性に美しい光の舞う光景を脳裏で追いかけていた。

菅田千尋（カソさん）の場合

Mの場合

11月初めの日はとても気持ちの良い天気で明けた。気分良く職場に着いた私はいつも様に鍵を取り出そうとして、しかし既にそれが開いていることに気が付いた。

「おはよう。めずらしいね、あなたが先に来てるなんて」

「たまにはね。田が覚めちゃつたからさあ。あ、おはよ」
開業前の掃除をしながら振り向いた三山は、実に爽やかな笑顔だった。早朝の切り裂くような空気の冷たさにさらされてこわばつていた私の頬がほつとゆるんだ。

三山と私は大学時代からの友人で、今ではとある会社を共同経営する間柄である。正確に言えば、彼女の事業を私が経理・事務面からサポートしているということになる。もちろんそうは言つても二人しか人手のない会社のこと。私も接客をこなすのだが。

私が荷物を置いていた内に三山は事務所内の清掃を終え、外を掃除するために出て行つた。私は帳簿類を整理することにしてデスクに向かう。

椅子にかける前に気が付いて、柱に付けたカレンダー一枚破る。書き込みができるシンプルなカレンダーのまっさらなページには、落ち葉色のインクで11月の文字が示されていた。

『ああ、そうか、11月なんだ』

今更のように私は認識した。

掃除を終えて戻ってきた三山が私の方へ向かってきて、その途中、カレンダーの前で立ち止まる。

しばらくじっとそれを見つめていた三山が、ぽつりと呟くのが聞こえた。

「ああ、もうなんだ」

そつと三日の表情を盗み見て、私は改めて今日のスケジュールを確認した。

三日が逃亡したのはその日の晩過ぎのことだった。

いつも明るくてエネルギッシュな三山が落ち込んでしまった時期がある。それが毎年のこの辺り。1~1月だった。

この時期は彼女にとつては大変辛い時期なのだ。家族旅行中に事故に遭い、ただ一人生き残った、それが5年前のこと。

三山斎という人間を劇的に変えたといつて過言のない事件の起きた時期なのである。

そういう事情は承知の上で、再会して3年このかた、毎年この時期になると逃亡を企てる、既にパターン化した彼女の行動になれっこになつたとはいえ、やはり仕事をしている身でのこの行動はいただけない。とりあえず三山の携帯電話に連絡をしてみる。

長いコールの後、やっと三日の声が返つてくる。それでも回線が通じただけでも私は安堵する。

「何やつてんの。今どこにいるの。今日1~5時から来客でしょう？」

「あー…そう、だけ？」

何を言つてもとぼけた返答を返す三日の声は微かで、聞き漏らさまいと私は全神経を聴覚に集中させる。

「三日にまかせる…お願ひねー」

私の言葉に生返事をして三日は、そう言つて唐突に通話を切つてしまつ。

「まかせるつてこら…！…いつ戻るかくら…」

怒鳴ろうとしたが、思ひどまつて受話器を置く。

毎回のことなのだ。それは分かつている。だからそこまで心配はない。だから、私がこんなに腹を立てているのは、そういうわけじゃない。

それでもそんな私たちの個人的な事情は社会生活においては何の強制力を持たないのだ。

私は大きく息を吐いて気持ちを入れ替えると、来客を迎える準備をするために席を立った。

『くやしいなあ』

胸の奥で燻つていたらしいぼんやりした想いを日本語に変換するとなれば、どう言葉に成つたらいい。

『何がくやしい?』

仕事の合間、ぽつとできた空白の時間にふと脳味噌の片隅がどうでもいいことに思考を巡らせる。だからこんなことは大変にどうでもよいことで、意味などない。重要性などない」と。だから好き勝手に思考の暴走を許してしまつ。

何がくやしいと言つて、私が三山の一一番になりえないというのが、なりえていないというのが、くやしいと思う。私は彼女のこと親友だと思つていて、彼女も私のことを親友だと言つてくれているから、尚のこと。

私たちは色々なことを話し合つ。それこそ公私取り混ぜてたくさんのこと。

それでも私は彼女の最大の傷に触れることができない。それは、私がその彼女の傷である時間を共有できていないからなのだろうと思つ。そしてそう思うからこそ、私もこれ以上何もできないでいる。本当はもっと三山の力になりたいと思つてゐるのに。

5年前、三山が事故に遭つた頃、私は三山の側にいなかつた。

大学を卒業してからすぐに私は留学していた。日本で就職して三山とは時々電話やメールで連絡を取り合つてゐた。しかし1年

も過ぎる頃にはそれも間遠になつていった。三山のことを忘れたわけでもなく、単に私が無精者であつただけなのだけれども。

三山が事故に遭い家族を亡くしたといつことは、2年田を田前にした頃に三山から知らされていた。しかし当然のことながらそのために帰国することはできなくて、気にしながらも帰国して三山に再会したときには既に事故から2年が経過していた。

3年ぶりに三山に会つて、私はひどく後悔した。側にいてあげたかったと思った。

何が変わっていたと言葉にはできない。ただ確信できたのは、三山に刻まれた傷は容易には消えない、一生背負うものであろうということ。2年が過ぎたその時未だ歪に固まりきつていなかつたそれは、5年経つた今でも一見平らかなようでいて、実は歪みきつたまま凝つてしまつていた。少しでも突付けば血と膿を吐き出してしまうかもしれない、生傷なのである。

側にいてあげたかったと思った。今でも時間を巻き戻せるならばそうしたいと思っている。結果的には何も変わらないのかもしれないけれど。でももしも私が側にいたら、今尚彼女に残る傷を少しでも浅いものにしてあげられたのかもしれない、そのくらいは自惚れていきたいのだ。

そのくらいには、三山斎に対する私の存在を重いものであると自惚れていたいのだ。

だから、とても腹立たしいのだ。

彼女を、三山斎を癒すことが、もしかしたら救うことすらできるかもしれないくせに、逃げる道しか選ぼうとしないあの男のことが。

気に喰わないのだ。

憎らしいのだ。

立花美子（リハセ子）の場合

S・の場合

たけなわを過ぎた飲み会の場には何とも言えない氣怠さが漂っていた。

月に何度か誰かの部屋におしかけて持ち寄りでやる飲み会がある。本格的な冬の季節の入り端を迎えた今夜も、特に理由もなく僕たちは集まっていた。

いや、理由らしい理由が一つあった。昨年大学を卒業して就職したあの人気が、久々に休みが取れたのだった。と言つても日中はやはり仕事が入つてしまつたということで、結局途中参加で早々に帰つてしまつたのだが。

まあ、休みが取れたから、というのも久し振りに会いたいから、というのも言い訳で、つまりは飲みたい連中が都合をつけて集まつたというだけのことなのだが。だつて別に彼女は遠い所に住んでいるわけではないのだから。

室内の様子はと言うと、正に一言で「死屍累々」。

基本的にのみたい奴が飲みたいものを持つて集まるのだから、リミットは自分で計らねばならない。しかしそれが旨くいつた例はない。まあ、こういうのを「若者の特権」というのだろう。

あれ？ 「若気の至り」だつたつけ？

もちろん例外はいる。途中参加のくせに人の2・4倍くらいのペースで飲んで周りのつぶれているのを尻目につい十数分程前に帰宅していつたあの人など良い例だ。彼女が酔いつぶれたところなど、僕は本当に一回くらいしか見たことがない。

今、この部屋に残っているのは僕を入れて3人。1人は完全につ

ぶれてぐーすか寝こけている。もう1人もついたままでやにや笑いながらその辺にあつた雑誌を読んでいたが、今見ると本棚にもたれて動かない。

そして僕はといえば、酔い覚ましに窓辺で風に当たつていて。まあ、多分、余人から見れば、他の2人と大差ない状態だろう。

既に肌寒いというレベルを超えて寒い夜気は、僕の火照つて朦朧とした脳髄をちょうど良く冷ましてくれる。

かすかに香ばしい香りが部屋の側から漂つてくる。曇ガラスのはめこまれた化粧ドアの向こうのキッチンスペースで灰色の人影が動いているのが見える。今夜のホスト、つまりこの部屋の住人であるカンさんが「コーヒーを淹れているようだ。

このホストは非常によく働く。

酒をつくつて肴をつくつて、皆が酔いつぶれる頃にはお茶が「コーヒー」が出てくるのだ。もちろん、本人も呑みながらだから、しばしば怪しいシロモノ代物が出てくるのだが、それにして、良い香りだ。何の豆かとかは分からぬけど、匂いだけでもおいしそう。「ボボボボ」という音も聞こえるから、そろそろできてくるだろうか。

だいぶ意識がクリアになってきた。わずかに尻の位置をずらして半身を起こす。

「へへへう、へへへへへへ」

意味不明の呻き声が聞こえて、僕はそちらを向く。先程までまるまって爆睡していた後輩が、芋虫よろしくのそのそと身を起こしているところだった。

「おーーーだいじょぶかーーー？」

間延びしたような僕の声に気怠そうに頷きながら、彼が大丈夫です、というようなことをもじもじ言う。とりあえず気分が悪いとかではなさそうだと思う。まあ、ここには今夜集まつたメンツの中で

一番に脱落していたから、量としてはそんなにいっていいはずだった。むしろペースの上がったサイさんに付き合つたり、酔つた頭でオリジナルカクテルを作り出したカンさんの試飲役にならなかつた分、悪酔いは心配しなくてよいだろう。

ちなみにテンショングが上がつてペースを1・2倍程に上げたサイさんと一緒にカンさんのオリジナルカクテルを飲んでいた奴は、気が付くとこの部屋にはいなくなつっていた。帰つてしまつたのか、未だに外で酔いを醒ましているのか、それは確認できていない。

「…あ、れ？ シュウ先輩、あの人は？ あの

どんよりした表情ながら、とりあえず覚醒したらしい後輩が周囲を見回しながら言つ。

「……ああ、サイさん？ もうとっくに帰つたよ。明日も仕事なんだ」と

僕の答こきょとんとした表情になる。

「ええ？ 明日つて日曜ですよお？」

「…あれ？ そudadよなあ？ でも確かにそつ言つてたけど……」

まあ、不規則な仕事だと言つていたから、そういうことなのかもしれない。

「それにしてもすゞい人でしたねえ」

かなり意識もはつきりしてきたらしい後輩がしみじみとした口調になる。誰のことを言つてているのかは名前を出されなくともわかるので、僕は頷いた。

「あの人、結局おれらより呑んでたでしょ？」

「しかもカンさんとのカクテルを」

「おれ、ちょっと飲んでみたけど、やばかつたつよ、あれ

「そーと一濃くて甘かつたよな」

その時のこと思い出したのか後輩が顔をしかめながら言い、僕も同じような表情で深々頷いた。

件のカクテルとは今夜カンさんがつくった中でも最悪の出来の力
クテルで、ミルク分と糖分の飽和状態の液体にアルコール分が加味
されていると思えばいい。麦茶グラスに入った褐色に濁つたカクテ
ル。甘さだけでも喉を焼いて、飲み込むと胸の中央辺りでかあつと
熱が生まれた。その感覚を思い出すと、今更のように酔いが回つて
くる。さすがのカンさんも失敗作だと認めて回収しようとしたそれ
を、サイさんは一度口をつけたんだから、と飲み干してしまったの
だった。

「さすがにカンさん呆れましたね」

そのとんでもないシロモノを喉を反らせながら飲み干したサイさ
んの姿が思い出される。そういえばあの後、いつものようにサイさ
んの笑い上戸のスイッチが入っていたんだっけ。

「キヤハハハハハ……」

としか表現しようのないあの陽気さにも慣れたはずだが、やはりう
るさかつた。頭に響くその声は確かにとてもきれいなのだが。

ザルとかウワバミとかいう言葉は彼女のためにあるに違いないと
僕は思う。

「でも、なんてのかなあ」

ふと後輩の声のトーンが変わる。

「なんつーか、うん、なんつーか、すごいい女って感じがした」「
はあ！？」

思わず素つ頓狂な声を出してしまい、慌てて自分の口を押された。
頭がずきずきするのは酒のせいだろうか。

「いや、おれも何て言つていいかわかんないんすけど
後輩は特に気にした様子もなく続ける。

「あの酒のみつぱりもちょっと…なんですけど。でもなんてのか、
何て言つて、すごく色っぽいってゆーのか……」

「そりゃサイさんは美人だけど」

「そういうんじゃないですよ。確かにかわいい人でしたけど。何つーのか…なんだろう?安心できないような。無防備つてのか?とにかく目が離せないような、そのくせ側について話してるとすげー安心できるってのか。あー、あの胸と目は反則だよなあ」

「いつも酔ってるな、と僕は改めて判断を下す。

つづづく、この場にサイさんがいなくて良かった。それにカンさんも とつい思つて、目を上げる。やはり曇ガラスの向こうで人影が見える。

「でもあれで今あのヒト、フリーなんでしょ?おかしいよなあ…ねえ?ほんとに何もないんすか?の人たち」

こいつは酔うと饒舌になるらしい。

「だつていよい雰囲気だつたじやないですか?間に割り込めないくらい。あんなひつついてんの見てたら、なんかこっちまで恥ずかしかったっすよ」

「あーーー…ああ。何もないらしいよ、あのヒトたちは。あれで」「…………わっかんねー————男だつたら普通はさあ…」

そう、あのヒトたちは何もない。少なくとも今は、と言つておるべきか。僕も詳しいことを知つてゐるわけではないが。確かに以前は「何か」あつたらしい。だが今では「付き合い」という関係ではない。はずだ。一応、サイさんはそう言つてゐる。

「まつたく、あんないい女、側について、何もしないつつーのがもつたいないよなあ」

僕の手が無意識に奴の頭をはたく。いてえ、と悲鳴が上がつたが大したことはないだろう。全然力など入つていない。

まつたく、少しば考へる。当事者の一方はドア一枚向こうにいるんだぞ。そう思つて、慌てて顔を上げた。閉じたドアの向こうから力チャカチャと食器の触れ合う音がする。良かつた、聞こえてはいよいよだとほつとする。

「じゃあ、シユウさんは何も思わないんすか?」

はたかれた理由は分かったのか、声を潜めながらも睨んでくる。

「僕はないな。だいたい、僕はみづきさん一人で手一杯だよ」

「…うそくせーー」

聞こえないくらいの呟きは、しかし口の動きで何を言いたいかは分かつた。しかしあえて無視する。

確かにサイさんは美人だし僕とて彼女に女性としての魅力を感じないわけではない。

でも、駄目なのだ。何というか、あの人と一緒にいると確かに楽しいけれども同時にひどく恐ろしくなるときがあるのだ。引き込まれるという感じか？いやむしろ呑まれるというべきか。

「はまるなよ

つい口にしてしまつてから、改めて言い直す。

「あの人にはまると抜け出せなくなるぜ」

ぶはっと後輩が噴出す。

「何すかそれ。先輩の言つてることの方がよっぽど生々しいですよ
何とでも言えばいいし笑えればいい。どうせこれが僕の正直な感想
なのだから。

ガチリンドアが開いた。あたたかく香ばしい匂いがふわりと漂う。
「何笑つてんだよ」

今夜のホストのカンさんがコーヒーを持って来る。この人は何でも凝り性で、これも自分でお気に入りをブレンンドした「コーヒー」なのだ。コーヒーなんてインスタントでも缶でも違いなんて分からぬ僕には、その辺りのこだわりはよく分からぬ。でも酔い覚ましとしてはカンさんの「コーヒーは絶品なのは確かで、僕は大好きだ。

「いやあ、噂通りのすごい人だったなーって」

適度にぼやかしながらへらへら笑つてみると、カンさんもくくつと笑つた。

その後しばらくは再びこの場にはいない人の話題を中心にくつちやべっていた。マグカップのコーヒーがなくなる頃、ふと話題が途切れる。一瞬の静寂が部屋の温度を一気に下げたような気がする。そんなタイミングでふと後輩が言つ。

「でも、何かあの人、今日は疲れてたんすかね

「え？」

「だつて、なんてのか、確かにすげーうるさくて酒入ると最凶つの分かつた氣がするけど、でも何かそれ以外のときはすごい寂しそうで　いや、悲しいうてのか、とにかく何とも言えない泣きそうな力オしてたんですよねー。それともあれが普通なのかな…」
「氣付かなかつた。そうだつけ?というのが素直な感想だつた。まあ、仕事で疲れていたのかもしね。そんな口だつてあるだろ?、あの人だつて。

物音に氣が付いて振り向くと、カンさんが部屋を出て行こうとしていた。

「悪い、出でくる

「へ?どこへ?」

「ちょっと

なんだかこちらが要領を得ないまま、カンさんは出て行つてしまつた。何だかわけが分からぬが、すごく真剣な表情だつたのが印象に残つている。

結局、その夜カンさんは帰つて来なかつた。

その日の少し前にサイさんが事故で家族を亡くしていたことを知つたのは、それから少し後のことだつた。

* * *

「そつか。もう今年もそんな時季か」

僕がサイさんの職場逃亡を知ったのはその日の晩であった。本当に偶然たまたま昼食のために『Mōone's Bar』に入つたため、ミコさんからマスターへの電話を聞くことができたのだ。あの時から五年経つ。サイさんは毎年この月、11月になるとナーバスになる。つまり家族の命日が近くなるといったたまれない気持ちになるらしい。サイさんにとって家族を亡くしたことはそれほどに辛い出来事なのだ。

〃「さんはこれはサイさんの甘えなのだと言へ。ただし、許容すべき甘えであると。

カンさんは、普段張り詰めているサイさんが、まるつきり脱力してしまつている状態なのだと言つ。月夜のサイさんがゆるんではかなくなつてしまつ、その延長上なのだと。

一人とも似たようなことを言い、多分同じくらい心配している。どちらも傍目には分かり辛い人だけど、僕には分かる。少し違うのは、ミコさんは怒つていて、カンさんは思い詰めるように悲しそうなことだ。そしてミコさんはそんなカンさんにも怒つていてるようだ。

「とりあえず、サイさんを見かけたら連絡しますよ。行きそうな所にも気を付けておきます…ええ、ここにショウさんもいますので、

伝えておきますよ……ええ、はい」

マスターが僕に視線を向けて、小さく口を歪めて笑ってみせる。

僕も軽く頷きを返す。

とりあえず、カンセんにも連絡を入れておこう、と僕は思った。

空木秋晴（シユウセイ）の場合

Kの場合

彼女のことをひとことで表現するならば、ちゅういちゅうだと思つ。ただし、昼の陽の中ではなく月影でこそきらきらと羽根を輝かす迷い蝶。

離れていれば鑑賞に値する美しさのくせに、近目ではグロテスクですらあるところまでそつくりだ。

捕まえたい。閉じ込めておきたい。そんな願望を捨て切れず、さりとて俺にその力はないことも重々承知していく。

俺はただ、目の前をひらひらと飛び回るたつた一人のちゅうちゅうに翻弄され続けている。

* * *

彼女が行方をくらませたとの連絡が入ったのは11月に入つたばかりの昼過ぎ。大学時代の後輩から携帯にメールが届いていた。曰く、

『サイさんが職場逃亡したそうです。
見かけたら//ちゃんと連絡お願ひします。
僕やマスターにもできれば』

気分が悪い。毎年のことだが。毎年同じように同じ騒ぎを起こすのはやめてくれ。頼むから。そう、怒鳴りつけられたらどんないか。その場面を想像して俺は深々と溜息を吐いた。

ちゅうちゅうは気まぐれだ。花から花へ、触れたり遊んだり止まつたり。

花の都合に構わらず、自分の好むところへ、気が向くままに、ふらふらと舞い飛び回る。

それがどうということではない。それがちゅうちゅうちゅうもので、それを知った上で花たちは彼女を愛し、欲するのだから。

ただそれに不満を持つなど言える権利は、例え当のちゅうにだつてない。そう俺は思う。

俺は平穏に暮らしたい。

たつた一人のちゅうちゅうに惑わされるなんて、[冗談ではないのだ。

* * *

5年前、彼女は事故で家族を亡くした。

家族で初めて行った海外旅行中の出来事であつたらしい。彼女一人が助かつたのは、たまたま別行動をしていたからなのだとか。彼女はごく普通の家庭で、ごく普通に愛されて、育つた。それが非日常の事故で突然、永遠に失われた。ひどい衝撃だつたろう。苦しんで当然だろう。

だが彼女が本当に心を碎かれてしまったのは、そんなことだけではないことは、皆は知らないことなのだ。

その夜出会ったのは本当に偶然だった。

たまたま大学のサークル棟で寝こけてた俺が目を覚ましたのが既に日付も変わらうかという頃。さすがに室内どころか棟全体に人気

がなかつた。帰るか、と思つた時、来たのが彼女だつた。

こんな、既に「夜」ですらない時間に人が来ることも、ましてやそれが女一人であることも異常だつたが、何より背負つた雰囲気が異様だつた。

入口で俺の姿を見留め、一瞬驚いた顔をしたものの、何も言わずに近付いてきた彼女は、視線も足取りもどこかふらふらしていた。机を挟んで向かいのパイプ椅子に座る。その時、ふわりとアルコール臭がした。

「酔つてんのか？」

「酔つてませんよー…ただワイン一瓶空けただけーー」

…絶対に酔つてるだろう、それは！

と思ったが、何も言わなかつた。それ以上に言つべきことがあると思った。

「帰るんですか？」

「あー…まあ、そろそろ……」

語尾は誤魔化すように消した。それよりも、と声に力を込める。

「どうかしたか？」

どうかしてないわけがない。彼女の家族が旅行中に事故に遭つたことは既に聞いていた。直後にこいつから電話があつたのだ。そしてしばらくは学校に行けないとと思う、という連絡。やはり真夜中にかかってきたごく短い電話は、いつも彼女の声とは思えない程、別人の声だつた。心配、はしていたのだ。例え普段はどんなに複雑に思つてはいても。

彼女はじつと俯いていた。机の表に何か書いてあるのかという程、じつと動かなかつた。泣いているのか、それとも眠つているのか、と俺が思い始めたころ、ようやくその肩が動いた。

「本当に、ひとりぼっちなんだなあって、思つて

「…え？」

ぼそりとつぶやかれた言葉は、こんなに静かな場所でさえ、聞き逃しそうなほど、微かなものだつた。思わず身を乗り出した俺の目

の前で、よつやく彼女が顔を上げた。色素の薄い、ブラウンの瞳が真正面にある。しかしそれは驚くほどに空虚で力無く、俺の背筋に寒気が走る。

「ねえ、千尋さん」

彼女の形のいい唇が動くのが見える。口唇もその口調も、乾き切つているように思えたのは気のせいか。

「私って一体何者なんでしょうね」

普段なら何言つてんだ、と馬鹿にしたくなるようなセリフが、何故か何も言えないと思う程に俺の全身の自由を奪い取った。

「

蠱惑の口唇が言葉を紡ぐ。

凍り付いたように硬直している俺の視線とかつきり絡み合つ彼女の瞳。

どこか浮世離れした色彩の淡いその色。

形良く整つたかつきりした眉。

すっと伸びた鼻梁。

青い血の色を透かしたこめかみ。

程よくなだらかな頬の線のもり上がり。

淡く紅色を透かした形の良い口唇。

抗えない俺は、ぎこちなく距離を詰めていた。

明け方の光を浴びる彼女の背は鮮やかな輝きに満ちていた。その眩さに思わず俺は目を細めた。細く輝く視界の中で、ゆっくり彼女が振り返る。

「おはよう」

にこりと微笑む彼女は、昨夜とはまるで別人であるよつて俺には思えた。何かを脱ぎ捨てたように、美しく見えた。

＊＊

『でもなんか、あの人今夜は疲れてたんですかね』

『なんてのか、すげー悲しそうに見えた。うまく言えないけど。さみしいってのか　とにかく、何とも言えない感じがしたんすけど』

後輩の言葉が俺の背筋に寒気を走らせた。覚えのある寒気だつた。それがどういうことか、理解する前に俺は立ち上がつていて。部屋を出る俺を後輩たちが呼び止めたが、なんと答えたかも覚えていない。

間違えたか？

見誤つていたか？

判断を誤つていたか？

それ以前に

何故気付くべきことに気付かなかつた？

何故、今日初めてあいつに会つた奴に見えたものが、自分には見えていなかつた？

この腕は彼女を抱いていたのに。

息のかかる程すぐ側で言葉を交わしていたのに。

まだ、俺は、間に合つのか？

街灯の少ない夜道の先で、見覚えのある背中を見つけた。

あの朝の背中に似て、さにあらず。

それはあの夜、月の明かりの下で見た彼女の姿だった。

一体この時間まで何をしていたのか。俺の家から彼女の家までは20分もかかるない。しかしどう見積もっても彼女が俺の家を出でから30分以上は過ぎている。

車も通らない、人も通らない。ちかちかまたたく街路灯がまばらに並ぶ、静まりかえったオフィスビルの狭間。

大きく振り回すように歩を進める彼女の靴がアスファルトに積もつた落ち葉を踏む音だけが風の中に聞こえていた。

しばらくその姿を眺めて逡巡してから、俺は一、三歩後ろまで近付いた。そこで息を整え、おもむろに口を開く。

「斎」

がさり、と枯れた葉の碎ける音がした。明滅する街路灯に照らされたコートの背中が、ゆっくりと振り返る。

星のよじに白い頬。夜の闇に紛れるしつとりした黒い髪。薄墨色におちる影の奥で、鈍く光る両の瞳。首に巻かれた鮮やかなブルーのマフラーが風に煽られ、ばたばたと音を立てる。その頬に光る、幾筋もの透明の雫が、まるで別世界のもののように見えた。

何故今の今になつてよじやくこれが俺に見えるようになったのだろ。

見るための材料は揃つていたはずなのに。

けんかしたんだ。

意地張つて。

だからあの日別行動したんだ。

そしたらみんな事故しちゃつて。

あたしだけ助かつて。

何で一緒にいなかつたんだろ。

そしたらあたし今こんなどこで一人ぼっちじゃないのに。
もしあたしがあの時死ぬ運命じやないのだとしたら、

もしあの時あたしがあそこにいたらみんなも死なかつたかもしれないのに。

病院に着いたのだつてもつと早くに行けなかつたのかな。

助けてつてお願ひすることもできなかつた。

血をつて言つたらダメだつた。

あたしの血、みんなに合わなかつたつて。

あたしの血、みんなを助けることすらできなかつたの。

こんなに有り余つてゐるのに。

あたしの血はみんなと同じじやなかつたんだつて。

血が同じじやなくたつてあたしがみんなを愛してたことは嘘じやなくて。

みんながあたしを愛してくれていたことは一つも嘘じやないけど。でもあたしが築いてきたあたしの記憶は、あたしが今のあたしであるための足場が、あたしがみんなと同じところで生きてきたつて証が、あたしがみんなと家族だつたつて証拠が。全部嘘だつたんだつて。

全部、根底が違つたんだつて。

あたしは本当は一人ぼっちで。

そして本当に独りぼっちになつちやつて。

あたしはあたしが誰なのかも分からなくなつちやつて。

抱き締めていた腕の中で、確かに切れ切れに、俺は姫の言葉を聴いていたのに。

今日の前で月光に照らされ輝く幾筋もの雪が、一つ一つのセリフを俺に思い出させる。

見えていたはずなのに、見ていなかつたもの。

田の前のこの女が、自尊心の強い、強い女が、何かを脱ぎ捨てる

ことができるときなど、夜の闇を除いて他になすことなど分かり切っていたのに。

朝の彼女が何かを脱ぎ捨てていたのではなかつた。

夜闇で虚ろに笑つたその姿こそが、眞の三山斎の姿だつたのだ。

「待つてたの」

夜の風に乗つて、微かな声が俺の耳に届いた。

「探しに来てくれるの、待つてたの」「細かく明滅する街灯の下で、ゆづくじと斎の頬が笑みの形に歪んでいくのが見える。

「見つけてくれるの、待つてたの」

口元の筋肉が引きつるよつて痙攣し、そのたびにぱた、ぱた、と零が撥ねる。

嗚咽もなく、ただ静かに涙を流す三山斎の姿はひどく醜くて、ひどく清らかに見えて、例えようもないほど慕わしかつた。

* * *

三山斎といふ女のことを表現しようとする、わざと誰もが困ると思ひ。

ある者はぱりぱりのキャラクターマンだと言ひだらうし、ある者は酒を飲んでは夢のような言葉を吐き続けるだけと言ひだらう。そのどちらも正しいと知つている俺は、といつと、それはもう、本当に困つてしまつのだ。

頭をひねつている俺の目の前を、ひらりとよがる羽根。

「　あ、そうだ」

三日斎はちよひちよひのよいつな女だと思ひ。ひらひら田の前を飛び回り、捕まえようとするればいつも空を掴ませられる。

捕まえられないのに、目の前でひらひらあでやかに舞う、ひるむひるむといちょうちょう。

古の人気がむき出しの魂の姿と信じ、彼岸と比翼を往来できるものと信じた美しい羽根虫。

メールを読みつつ深々と溜息を吐く。しかし脳裏には高速処理で斎の行きそうな場所がリストアップされている。そんな自分自身に更に溜息を一つ。

結局俺は、この蠱惑に捕らわれ続けてくるのだろう。

菅田千尋（カンさん）の場合

Sの場合

* * *

私は夢の中、「私の部屋」で立っていた。

明らかに「現実の私の部屋」とは違う場所なのだが、夢の中の私はそこを紛れもなく「私の部屋」と認識しているのだ。

特にこれといった特徴のないマンションの一室。妙に無機質に見える部屋。視線を床に下ろすと、「お母さん」が座っていた。
少し小太りの体で背を丸めるようにして正座しているので、何だかちまつとして見える。グレーに見える髪の毛を後ろでひつづめている。そんな姿のおばあさんだった。

(あれ？私のお母さんって…？)

違和感を覚えるが、それ以上に夢の中の私は彼女を「お母さん」と認識していた。だから疑問もすぐ消えた。

突然、侵入者が現れた。玄関への角からぬつと現れた男。奇妙に静かで暗かった。

(襲われる！)

とつさに思つた。恐怖感と怒りが同時にはじける。

(「お母さん」を守らなきや！)

私は慌てて「お母さん」を庇つよつて男に向かつた。

(近付けさせない！)

私が侵入者に敵意を向けるのに呼応したように男が凶暴性を向けてくる。殴りかかるうとする腕をおさえ、もみ合ひのように押し合ひ。恐怖よりも頭に血が上つたような興奮。無我夢中で争つていた。

(やめなさい)

突然声がした。断固とした、強い声。驚いてそちらを見ると、それは「お母さん」だった。

(やめなさい) なのだから

どきりとした。思わず腕の力を抜いて、そして私は自分が争っている最中だったことを思い出す。

(危ない！「お母さん」が！)

慌てて向き直る。でももうそこには脅威はなかった。

私はこわくて、悲しくて、とてもとても、かなしかつた。

* * *

墓参りをするのは年に数度。故郷に墓を作ってしまったため、毎日行くなんてことはできないのだ。それでもあたしはそうしてあげたかった。血とか地とか、縁のあるところで眠らせてあげたかった。今年も気付いたら、あたしは故郷の地を踏んでいた。いつ、どうやって新幹線に乗ったのかも覚えていなくて、懐かしい光景の中に自分が立っていることに気が付いたときは、むしろあたし自身が呆然としていた。

既に体が覚えている道を歩き、いつもの花屋で少しの赤い花と長持ちする緑の枝と線香を買い、見上げるような長い石段を息を切らせて登る。

既に冬の手前の季節であるにも関わらず、登り切ったときには肌はじんわり汗ばんでいる。軽く額を押さえながら見下ろす眼下に遠く青く円い広がり。薄く灰にけぶるようなその色が、あたしの心を何となく落ち着かせる。胸いっぱいに息を吸い込んだ。何となくまぶたの裏側がじんわり熱くなつた。

まだ真新しいといつてよい墓は、それでもそれなりに汚れていた。それでもきっと、父さんや母さんの縁に繋がる誰かや兄さんの知人は来てくれているのだろう。見覚えのない花や線香の残骸があつた。それらをきれいに片付けて、新たに水と花と火をあげる。

あたしはこの中に入ることはないだろうな。手を動かしながらあたしは思う。三人だけのためのこの墓は居心地いい？と心の中で語

りかける。

一般的な常識で言うなら、将来誰かがあたしを嫁にもらってくれれば、あたしは嫁ぎ先の墓に入ることになるのだろう。でもどちらかと言えば、あたしは一生どこにも属さず最期はどこかの海に葬られたい。そんな風に考えてしまう。

生命を連鎖させ、種を存続させることができ生物の生命の大前提であるとするなら、あたしはそれに従う氣のない異端児なのだと思う。自分の遺伝子など後世に残らなくつて構わない。そう本気で思っているのだから。

「別にね、あたしの出生がどうこうことじゃないんだよ」
墓前にしゃがみこんだまま、呟く。見違えるようにぴかぴかになつた磨かれた石の表面に、あたしの顔がぼんやり映つている。

「どうにもね、あたしはそういう気がないんだってこと。多分、知る前からやつは思つてたの。でもはつきり口に出して言えるようになったのは……この数年だけだね」

自分の遺伝子を持った人間が何十、何百、何千年後には、そのことに価値を見出せない。

繋いであげたい遺伝子にも巡り会えない。

かと言つて、人間の存在を価値がないとか思つてるわけじゃない。ただ「私」に関して考えるなら、人間が後世に繋げるものつて、そんなものだけじゃないんじゃないかと思うのだ。

「言い訳……でしかない？ それともやつぱ詭弁かな？」

自嘲げに笑うと、あたしは立ち上がつた。

また来るね。そう呴いて踵を返す。燃え尽きた線香の焦げ臭い匂いがした。

ただ愛しい人が、存在が欲しいだけなら、あたしは身をもつて知つてることがある。血が繋がつてさえいれば無条件に愛せるというわけではないということだ。

家族を亡くして初めて、あたしはあたしにたくさんの中の「血縁者」が存在するということを知った。それは誰かが死なない限り、知り合つこともなかつた「親戚」なのだ。そして彼らの存在があたしを救うということはなかつた。彼らはあくまで「他人」だった。たとえあたしが本当に父母と血が繋がっていたとしても彼らは変わらなかつたろう。

「血縁」とは単なる生物学的な繋がりであり、そこに交友が成立するかどうかはあくまで人間同士の努力によるものなのだ。彼らはそれをあたしに学ばさせてくれた存在であつた。

ならば一体、自分の血を後世に残すことに、何の意味があるだろう？

三山（サイさん）の場合

Mの場合

15時過ぎの客との打ち合わせは滞りなく終わった。

といつても、今日の主な打ち合わせ内容が予算の詰めと書類の確認という、事務レベルのものであったからこそだ。これがプランの打ち合わせであつたなら、私にはお手上げなのだ。

そう考えると、三山に怒つてもよいのではないかと他人からは思われそうだが、私にはそれはない。むしろ都合よくこの日を選んだ三山に感謝をする。

そしてこんな私のことを、親しい友人もはにじめて「甘やかしすぎ」と言ひ。

私自身は三山に甘くしていいるつもりはない。でも彼女の方が私の中で一番であることは否定しない。

私が三山と出会ったのは大学生のとき。同じ学部の同じ学科だった。女子の多い学部だった。

当時から私の性格は変わらない。少しばかり協調性というものはできたとは思っているが。親しく話す友人はいるが、特にそれ以上懇意になろうという努力には乏しかつた。だからといって別に不便を感じたこともなかつた。それで全く構わないと思っていたのだ。

あの時までは。

私が大学に入学して数ヶ月後、私の親がとある脱税事件に関わり、逮捕された。幸いというか何というか、罪状は軽く、今現在は日常生活に戻つてきている。

だが、それでも当時は、新聞にも取り上げられるほどの事件の関係者であった。実家を出て一人暮らしをしていた私のところまで来た記者もわずかではあるが、いた。

そしてそんな状況は、私を周囲から孤立させた。

数少ないながらもいた親しく話をする友人は私から距離をとり、聞こえるか聞こえないかの陰口は、私にも届いた。

気にしているつもりはなかつた。

小学生の子供くらいならともかく、いい加減いい年をした大学生のこと。あからさまないじめや嫌がらせなどはなかつた。

それでも気が付いた時には私が友人と思っていた人は私を避け、法学を志していた私を責めるような声も聞こえてきた。

気が付かないつもりでいた。

でも気が付いたら、私はひどく孤独で、傷付いていた。

そんな時、ただ一人私を避けなかつたのが、三山斎だつた。別に彼女が何かしたわけでも、何か言つたわけでもない。何もしなかつた。何も態度を変えなかつた。でもそれこそが、私を本当の孤独に陥れることを避けた。

私はいつまでも、彼女の言葉を忘れない。

「ミコが何か悪いことをしたの？ 何もしてないでしょ？」

何かの会話のはずみのそんな短い一言。

何でもない、そんな普通の一言が、今なお私の中から消えない。

幸い、事件はそんなに長い間世間を騒がせることもなく、私は無事に二年次から法学の専門コースに進んだ。

世間も、そんな事件のことはすぐに忘れ、話をする友人も、また戻ってきた。

三山は、終始一貫変わらなかつた。事件の前も、最中も、後も。コースが違つたことで授業もあまり重ならなくなつた。

でも、会えば会話は弾むし、どこかへ遊びに行つたり、買い物をしたり、飲みに行つたり。そんな付き合いは、彼女と一緒にときが一番楽しかつた。

私は、彼女と一緒にいるときが、誰といふよりもいつも気楽で、誰といふより楽しかった。

そしてそれは、今でも変わらない。

他人がどう思おうと、構わない。

私には、三山が大切だ。

私を救ってくれた、三山が幸せであつてほしいと願う。

三山自身がどう思つていようと、私には三山が大切なのだ。

三山には幸福であつてほしい。

だから、あの男は気に入らない。

誰よりも気に入らない。

でも、三山はあの男をおもつている。

だから、私にはそれ以上何も言えない。

三山の幸福は、三山が選ぶもので、私が選ぶものではない。

だから、気に入らない。

あの男は、気に入らない。

立花美子（ミコさん）の場合

Sの場合

墓地を出ると田の前に小さな教会があつて、その裏からたくさん
の子供たちの声が聞こえていた。あたしは少しだけためらつと、ゆ
っくり中へ入つて行つた。

開けつ放しの鉄柵の扉を抜けて木立の下、砂利道を歩く。角を曲
がるとあたしに気付いた初老の女性がにっこり笑つた。

「ああ、いらっしゃい、三山さん」

閑達なその声が懐かしくて、あたしは自然と口許が弛むのをおぼ
えた。

ここには教会に設けられた孤児院。そしてあたしを迎えてくれたの
は恵子さん。この小さな孤児院の院長さんでもある。

彼女と知り合つたのはここにお墓を作つたとき。

一人で何もかもやらねばならなかつたあたしは、恐らく過労とス
トレスで、気分を悪くしていた。木陰のベンチでへたり込んでいた
あたしを裏に連れて行つて休ませてくれたのが恵子さんだった。そ
れ以来、何となく墓参りの度にあたしは彼女を訪ねている。年齢は
かなり離れているが、彼女の話は、とても楽しい。

「久し振りね。元気そうで良かつたわ」

事務所でお茶を出してくれながら、彼女が笑つた。

恵子さんはとても若い。実年齢はもちろん知つていてるけれど、む
しろそちらの方が間違つているのではないかとさえ思うことがある。
それが彼女が幼い子供たちと毎日接しているからなのかどうかは分
からない。だけど彼女がこれまで色んなことを経験してきているこ
とは確かで、こういうのが人生乗り越えてきた人の大きさなのだろ
うかと思う。しかしそれでいてまったく押し付けがましくないその
人への接し方は、間違いなく彼女自身の美德だと思う。

最近のこと、仕事のこと、旅行の話。

とりとめもなく話し、聞く。最終的にはあたしは彼女の話を聞く専門に回ってしまうが、それが楽しい。

あしたちがそうして話している間も、事務所内を子供たちが出て入り禁止になつてるので恵子さんも注意はするのだが、子供たちは一向にやめる気配がない。入れ替わり立ち替わりいがぐり頭やおさげ髪の新顔がやって来る。もしかしたらちよつとした肝試しになつているのかもしない。

「そう言えば、夏つちゃん、元気ですか？」「うん、ます。」

夏つちゃんとは夏子ちゃんという女の子で、この施設の子である。出会つたときはまだ赤ちゃんだつた。今はもう6歳になるだろうか？あたしはここに来るたび、彼女と遊んでいるのだ。しかし確かに彼女には養子縁組の話がきていたはずだつた。その後どうなつたかとかは聞いていなかつたので、気になつていたのだ。

すると恵子さんは悲しそうな表情になつた。

「それがね……あの子、ここに戻つているのよ。話、解消しちやつてね」

驚くあたしに恵子さんは説明してくれた。

話は結構最終的なところまで進んでいたらしい。夏つちゃんも特に拒否反応は示していなかつた。そのように見えた。しかし何度目かにその家族と会つていたとき、夏つちゃんは『発作』を起こしてしまつた。結局はそれが原因で話は解消してしまつたらしい。

夏つちゃんにそんな病気があつたことを知らなかつたあたしは本当に驚いた。少なくともあたしはその場面に立ち会つたことがなかつたのだから。

「施設では起こらないの。原因も分からぬし。でも一旦暴れ始めるど、誰にも止められなくなつちゃうの。意識を失うまではね。今

回みたいな話が進んで、その家族と接し始めるところから始めのよつなの……」

「……」とは、今までにも何度かそういうことがあったというこどものか。あたしにはとても信じられなかつた。少なくともあたしの知る夏子ちゃんはそんな事情を抱えているような子供にはとても見えないのだから。

「でも私はあの子にはきちんとお父さんとお母さんを迎えてあげたい。その中で幸福を見つけてほしい。本当は夏子ちゃんもそれを望んでいるはずなの」

恵子さんの言葉に、あたしも深く頷く。夏子ちゃんは事情があって本当の両親の許から離されているといつ。

夏子ちゃんの精神が自立して、実親の許で暮らしたいと望むのならそれでもいい。でもそれまで、そこまで成長するためにも、たくさん人の愛情を受けてほしい。たくさんの心と人と選択肢があることを知つてほしい。そんなものを与えられる父母という存在が、彼女には必要なのだと思う。

夏子ちゃんはとてもはにかみ屋でインドアな性格の子供だ。屋外で走り回つて遊ぶよりも室内で本を読んだりお人形で遊んだりする方が好きな子供だ。だからこそ、あたしなんかに懐いてくれるのだろう。でもとても優しい、いい子だ。どうしてこんな女の子がうまく生きていけないのだろう。不公平だと思う。

「遊んでいつてあげてくれる？」

「もちろん。あの子に会つたためにここに来てるようなのですから」

その言葉を期に事務所を出て子供たちの部屋へ向かつ。夏子ちゃんはやはりそこにいた。部屋の入口で夏子ちゃんの名を呼ぶと、窓の側の明るいところでこちらに背を向けていた彼女が振り返つて嬉しそうに笑つた。

今日の夏子ちゃんはお絵描きをしていた。他にも2、3人の子供たちがいたが、みんなそれぞれ絵具でどろどろになつていた。キャンバスは四つ切りの画用紙なんかじゃ足りなかつたようである。

夏つちゃんと一緒に子供たちの相手をしつつ側で見守っているあたしに、夏つちゃんが近付いてきた。そして両手で持っていた画用紙をあたしに差し出した。礼を言ひて受け取つて見ると、やけに小さな女の子の絵が描かれていた。

「おお、上手。これは誰？」

あたしが尋ねると夏つちゃんははにかんだよつともじもじ笑いながら、あたしを指差す。

「え、あたし…？ わあ、ありがとう、嬉しいわあ」

あたしは知らず満面の笑顔になつていたようだ。片手で夏つちゃんをぎゅっと抱きしめてあげる。夏つちゃんがくしゃくしゃに表情を歪めながら笑い声を上げる。

昔読んだ絵本に載つていたお姫様のような女子。あたしとの共通点といえば、髪の長さと性別くらいだが、それをあたしと言つてくれることだが、うれしかつた。

「あ、恵子さん見てください。夏つちゃんがあたしを描いてくれたんです。」「

ちょうど部屋に入つて来た恵子さんに絵を見せながら言つと、彼女はひどく驚いた表情をした。しかしそうちにこり笑うと、夏つちゃんと絵をあたしを交互に見ながら夏つちゃんの頭を優しく撫でた。

「良かつたね、夏つちゃん。三山のお姉ちゃん喜んでくれて」

恵子さんの言葉に、夏つちゃんが大きく頷いてあたしを見た。声を上げて笑つている夏つちゃんはとても珍しくて、あたしはいつもよりも夏つちゃんがとてもかわいいと思つた。

「ねえ、三山さん、夏子ちゃんのねねさんになる気はない？」

田の暮れる頃、院を辞去して駅へと向かうあたしを門まで見送りに出てくれた恵子さんが言つ。その唐突さに冗談かと思つて振り返

るが、彼女はひどく真剣な表情をしていた。その口元に困惑につつ、あたしは首を振る。

「あたしには無理ですよ。だいたい、養子をとるには結婚してなきや黙日なんでしょう?」

「結婚する予定はないの?」

「あいにくと」

おどけたような仕草で肩を竦めてみせるが、恵子さんはやはり真剣そのものだった。だけどやつぱりあたしには無理だと思つ。だから重ねて真剣に断りの言葉を告げる。こんなこと、軽々しく同意なんてできるわけがない。夏っちゃんを大好きだと思う感情と彼女のお母さんになるということは同次元で考えてよいものではないはずだ。

「そう、残念だわ。でもしつこいと思つかもしれないけど、本当に少しでも心の隅に置いておいてくれると嬉しいわ。夏子ちゃんは本当にあなたのことの大好きなのよ」

あたしが断ることはそれほど意外なことではなかつたのだが、すぐに恵子さんはそう言つてくれた。それほどがっかりもしてはいないうだつた。でも声と表情は真剣だつた。だからあたしもそのままでいてはいけないような気持になる。

「ありがとうございます。そう言つていただけるのは、本当にありがたいことなのだと思います。あたしも夏っちゃんのこと大好きですよ。だからあの子には本当に幸せになつてほしی。そのための最善の方法は、あたしにも考え方をさせてください。そのためなら助力は惜しません。それにお母さんにはなれなくとも、あたしはずつと夏っちゃんのお姉さんではありたいと思つています」

考えながら、言葉を選びながらそう告げたあたしに、恵子さんはやはりにっこり笑つて頷いてくれた。

Kの場合

『三山斎が行方不明になつた』

そんな知らせが俺のところまで届いたのはその日の昼過ぎ。
確かに驚きはした。しかし同時に「ああ、もうそんな時期だった
か」と思う。

それほどに彼女 斎が1~1月になると行方をくらますのは年中
行事になつていた。

彼女はいつも誰にも何も言わずに姿を消す。そしてその日のうち
か数日後にはふらりと戻つてくる。

戻つてきた時にはすっかり普段の様子に戻つている。しかしその
間どこへ行つっていたのか、それははつきり語ろうとはしない。
斎のこんな奇行は4年ほど前から始まつている。

だから、実は、彼女の行動の理由は、分かつていてる。

5年前、三山斎は家族を亡くした。それが、1~1月。
以来、1~1月が近付くと彼女は精神的に不安定になる。
そうして、ふらりと姿を消す。
なぜ、どこへ行つているのか？

少なくとも 死のうとしているのではないことは確かなことだ。

その日は早退することにした。幸い、仕事も込んでいなかつた。
少なくとも昼までは。

昼過ぎにそつと仕事を出た俺は、頭の中でいくつかの場所をリ
ストアップしながら、電車を乗り継いで実家に戻り、車を借り出し
た。

実家の母は何か言つていたが、ろくに聞かなかつた。

そんな自分に、少し経つてから驚きの感情が広がってきた。

実家は今のお住まいの隣の市にある。

そこから車を走らせながら頭の中で再びリストをさらい。

といつても、思いつく先はそんなにたくさんない。

卒業した学校、前の勤め先。今現在の生活環境を除けば、驚くほどに彼女のこと知らない自分に気付く。

といつてもそれが当然なのだ。

斎との付き合いで、一番距離が近かつたのは恐らく学生時代だが、それとてそんなに長いものではない。

何より、『現在』が大切だった。それだけでよかつた。

本当にそれだけでよかつたのかは、誰にだって分かるわけもないと思つ。

学校そばのコンビニに車を止めて構内に入る。

授業中なのか、人気は少ないが、雑然とした雰囲気は今もある頃と変わらない。

初めて会つたのは、彼女が入学したてのときだつた。

髪が長かつた。真新しいスースに、踵の高い靴音。メイクも、今より派手だったかと思う。

全体的に、「女子大生」というやつだつた。

そして、どちらかといつと苦手なタイプだつた。

はつきりした性格からくる言葉は無意識でも痛いといふを突いてくるものだつた。

だから、よくわからない。

彼女がなぜ俺を気に入つたのか。

卒業後も付き合いが続いているのか。

なぜ、俺がこんなに斎のことを気にかけなくてはならないのか。

か。

斎の以前の職場の前を通り過ぎ、少し迷つて彼女の家に行く。

無駄と思いつつインターーフォンを鳴らすがやはり何の返事もない。

再び車に乗つて、海の方へ向かう。

夕方近い海浜公園は母子連れの遊んでいる姿や、のんびりベンチに腰掛けている老人の姿、キヤッヂボールやらスケートやらで遊んでいる子供の姿で賑わっていて、翳り始めた陽光が穏やかで暖かかった。

斎はこの公園が好きだった。

気が向くとここへ来て海を眺めているのだと言つていた。
自分自身のことを『水の民』だとか言つ彼女にとって、この場所がどんな意味を持つのか、正直なところ俺には理解できない。

ただ、この高い空と上空に散らばる白い雲、くすんだ蒼い海、そして鈍い緑。この光景を愛せることは、少なくとも悪いことではないと思つ。

ここで、ただ無言で沖を眺める彼女。
夜の満開の桜の下で明るく笑う彼女。

薄明かりの下でグラスを傾け夢現の言葉を紡ぐ彼女。

そのどれもが必ずしも愛しむものではない。

でもどれかが欠けて目の前から失せたとしたら、それはとても嫌だと思った。

無言で見通していくような目も、突き放したような物言いも、やわらかなぬくもりも、それは既にこの世界から失われることは考えられないことだった。

「ショーガない、のか…………？」

認めるのはどこか癪に障つたが、無視するのはやはり自分を偽っていると感じられた。

気が付くと陽はすっかり落ちていた。

急に肌寒さを感じて、俺は立ち上がった。

車を暖める間少し考えた。

それから車を駅に向けた。

菅田千尋（カシンさん）の場合

Sの場合

一人であること、辛いことを再確認しに来ているようなものなのに、なぜ帰るときの気持はいつもこんなに楽なのだろうと思つ。

夏つちゃんの笑顔。恵子さんのあつたかい優しさ。心落ち着ける丘の上からの蒼い海の光景。風の湿り気。匂い。それら全てがあたしを包み、角を円くする。

離れて初めて知った地の縁の力。失つて初めて知った人の優しさ、手の温もり。

血の縁など幻想であるが、血の通つた人間の温度は人間を癒す最高の存在なのだと、知ることのできる時間と場所。

「結局、どんなに否定しても……」

速く流れ過ぎて行く車窓の景色を眺めながら、あたしは呟いた。それから一つ大きなあぐびをする。そのまままぶたを閉じると、すとんと意識が闇に落ちた。

たくさんイメージが脳裏に浮かんでは流れゆく。

知らない顔も知っている顔も、知らない場所も、馴染みの場所も。忘れかけていた人も忘れようもなく近しい人も、皆。でも固定したイメージには、どれもならなかつた。断片がちらりと浮かぶのを捉えようとすると、また意識が裏返る感覚。

『夢』ではない。ただの「イメージ」の群像。それは結局何のインパクトもあたしに与えることはできなかつた。

そのまあたしは下車駅まで一度も田覓めるとはなかつた。

駅舎を出ると、既に田はおちていた。見上げると遮るものがない

全き戸。

明日は晴れそうだ。そう考えると、自然とあたしの口唇は笑みを浮かべていた。

視線を戻して、そこに立つ人に気が付く。
街灯の光を浴びて、じっとたたずむ人。
なんで。

言葉が出かかるが、咽喉の奥に留める。
馴染みのある彼の姿は見慣れない表情を浮かべてそこにあって。
ああ、今、これは現実なのだなあと妙な実感を覚える。

おもむろに、ゆっくりと、近付いてくる。
目の前で、足を止めて。

見上げるどすいぶん不機嫌そうな顔が私を睨んでいる。

「お前は、ばかか」

沈黙を破る第一声にさすがに虚を突かれて、とつさに言葉を返せない。

「帰るぞ」

ただ瞬きして見上げている私の肩を叩くと、彼は 千尋さんは踵を返して歩き始めた。

意外なほどに熱くて優しい肩の感触に、ようやく私の金縛りが解ける。

「どうしたの」

追いかけて、隣に並ぶと、少しだけ不機嫌を解いた顔が振り向いた。

「送つてやる」

ぶつきらぼうで、愛想が欠けていて。
ああ、でも、帰ってきたんだなあ、と。

そんな実感が心に広がったのを感じていた。

『NERVOUS NOVEMBER』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7612c/>

NERVOUS NOVEMBER - 月下草シリーズ08 -

2010年10月20日10時34分発行